

# 肝芽腫 (Hepatoblastoma)

## 肝芽腫について

肝芽腫は、小児の肝臓に発生する腫瘍のうち最も一般的な悪性腫瘍（80%以上）で、通常5歳以下の子どもに多く、特に3歳以下の乳幼児に発症することが多いです。まれな腫瘍であり、肝臓の未熟な細胞（胎児型または幼児型）から発生します。肝芽腫は肺に転移しやすく、はじめて見つかった時点で約20%に肺転移が見られます。

明確な原因は不明ですが、肝芽腫の発生リスクが高くなる場合として、出生体重1,500g未満の低出生体重児、家族性腺腫性ポリポーシス（Familial Adenomatous Polyposis; FAP）、先天的な腹壁異常と大きな舌を主症状とする Beckwith-Wiedemann 症候群 などが知られています。

## 症状について

肝芽腫は多くの場合、腹部の腫瘤（しこり）以外の症状はなく、腹痛を訴えることは稀です。腫瘍内出血や腫瘍破裂が原因で、まれに出血性ショックを引き起こす場合があります。その他、体重減少、悪心などが見られることがあります。

## 診断について

肝芽腫を診断するために以下の検査を行います。

### 1. 血液検査

$\alpha$ （アルファ）-フェトプロテイン（AFP）の上昇が特徴的です。肝芽腫ではほぼすべての症例で上昇するため、診断価値の高い検査の一つです。

### 2. 画像検査

超音波検査、CT検査、MRI検査を行い腫瘍の大きさや位置、他の臓器への転移を確認します。

### 3. 病理検査

腫瘍組織を生検し確定診断を行います。肝芽腫は、胎児型、胎芽型、上皮・間葉混合型などに分かれます。胎児型のうち純胎児型と呼ばれる腫瘍は予後が良いことが知られています。

## 治療について

治療法としては、手術による腫瘍の摘出が最も重要であり、病状に応じて化学療法、放射線治療、肝移植が適応となることがあります。早期に発見し適切な治療を行うことで、治癒の可能性が高くなるとされています。

#### 1. 手術治療

完全切除が可能であれば、手術によって腫瘍を取り除き根治を目指します。

#### 2. 化学療法

腫瘍が大きい場合や血管の近くにある場合には、化学療法を先行して行うことがあります。また手術後の再発予防としても用いられます。主な化学療法薬としてシスプラチンやドキソルビシン等が一般的に使われます。

#### 3. 放射線療法

手術や化学療法との併用で行われます。

#### 4. 肝移植

腫瘍が広範囲に及ぶ場合や、再発した場合に行われます。

## 執筆者

- 氏名： 石津 洋二
  - 所属医療機関： 名古屋大学医学部附属病院
  - 診療科： 消化器内科
- 
- 氏名： 村松 秀城
  - 所属医療機関： 名古屋大学医学部附属病院
  - 診療科： 小児科
- 
- 氏名： 田井中 貴久
  - 所属医療機関： 名古屋大学医学部附属病院
  - 診療科： 小児外科